関東大震災下の中国人虐殺事件が明らかにされるまで

——資料の所在・発掘および調査の経過と二三の問題点——

今　井　清　一

はじめに

今から69年前の関東大震災では，激しい大混乱の中で朝鮮人が放火し暴動を起こしたとの流言が広がり，日本の軍隊，警察，それに在郷軍人・消防組・青年団などで作られた自警団などが，何の責任もない数千人の朝鮮人を数日間にわたって虐殺するという事件を起こし，数百人の中国人も虐殺された。近代日本の民衆の歴史の中でも汚辱に満ちたページである。しかもこれらの事件は，日本の敗戦までは，真相を明らかにすることは許されず，少数の批判的な人びとはあっても，国民的な反省は行われないままであった。このことは，15年戦争中に日本軍がアジア諸地域で残虐行為をくりひろげたことと無関係ではない。

しかも敗戦後になって批判の自由が認められてからも，かなり長いあいだ，これらの事件についての本格的な究明は行われなかった。それがようやく軌道に乗りはじめたのは，関東大震災の40周年にあたる1963年からであり，さらに日本政府が極力隠蔽につとめた中国人虐殺事件については，それから10年余りも明らかにされないままであった。

その大きな原因は，日本の政府や軍の当局が一貫して真相の隠蔽と資料の湮滅に努めたことにあるが，研究者の側でももっと早くから問題に目をつけ，史

料の発見に努力すべきだったという反省点もある。とくに外交上にも問題になる中国人虐殺事件については，日本の当局の真相を隠そうとした発表の中からも，疑問点を見いだすことができるし，また中国での報道を調査すれば，もっと早く真実を明らかにできたはずである。そしてそれは，朝鮮人虐殺事件などの究明にも役立ったであろう。来年で事件70周年を迎える今日，この事件が研究者によって究明されてきた経過を振り返ることによって，そこから関係史料の在り方や研究上の問題点，さらには今後の解明の方向を見いだしてみたい。

この小文は，1992年９月12日に東京都江東区森下文化センターで開かれた中国人労働者集団虐殺69周年追悼記念集会での報告を，集会席上での参加者の発言も参照して書き改めたものである。その席上で配布した史料年表を補正したものを文末に付し，注記に代えた。なお歴史的人物と現存の方がたとの境界がはっきりしないので，小文では敬称はいっさい省略させていただくことにした。

1

最初に，関東大震災の下で起こった朝鮮人虐殺事件，中国人虐殺事件とこれに関連した社会運動家の虐殺事件ならびにそれらの事件が当局によって発表される経過を概観しておこう。

1923年（大正12年）９月１日正午２分前に相模湾を震源地とする関東大震災が起こり，とくに東京と横浜では大火災が燃え広がり，東京では３日朝まで燃え続いた。死者・行方不明者が14万人を越え，罹災者は300万人にのぼった。２日には，朝鮮人が放火や井戸への投毒を行い，強姦したり暴動を起こしたという流言が広がる中で，加藤友三郎首相の病死で辞表提出中だった前内閣の閣僚が戒厳令を布告し，軍隊が出動して治安維持にあたることとなった。その直後に第２次山本権兵衛内閣が成立したが，出動した軍隊と警察や自警団など民衆の手で朝鮮人虐殺事件が広がり，数日間にわたって激しさを加えた。３日の朝には臨時震災救護事務局警備部で，朝鮮人で容疑のないものは保護して適当な場所に収容するが，容疑の点のある朝鮮人は警察又は憲兵に引き渡して適当

に処分すること，要視察人，危険なる朝鮮人等については充分に視察警戒を行うことが決定された。その昼には亀戸のすぐ南にあたる大島町で多数の中国人労働者が虐殺される事件が起こった。当時の外務省記録は大島町事件と呼んでいる。同じ3日の晩には純労働者組合の平沢計七と南葛労働会の川合義虎らが亀戸署に検束され，5日未明に出動中の軍隊に殺害された。他にも自警団員や多数の朝鮮人が殺された。亀戸事件である。ついで中国人たちを気遣って9日に大島町に出掛けた中華民国僑日共済会長の王希天が軍隊に逮捕され，警察とたらい回しにされたのち12日に殺害される事件が起こった。王希天事件である。そして16日には大杉栄・伊藤野枝夫妻と米国生まれの大杉の幼い甥とが，東京憲兵隊で甘粕大尉らに殺害された。当時は甘粕事件と呼ばれた。震災による混乱が一応収まったのちも，こうした血なまぐさい事件が続いた。

当局は戒厳令に続いて治安維持令とも流言浮説取締令とも呼ばれる緊急勅令を出して言論を取り締まり，これらの事件に関する報道は一切禁止された。「更に大震災地において日支国交上の問題を惹起するなどのことが発生したので，当局は一層新聞記事の取締りを厳にし，死体の写真の掲載を一切禁止し，他の原稿については内検閲」を求める通牒を9月18日に各警察署，各新聞社に発するなど，厳しい言論取締をおこなった（美土路昌一編著『明治大正史・1・言論編』p. 301）。

こうした言論弾圧をかいくぐってまず明らかにされたのは，国際的にも有名なアナーキストである大杉栄殺害事件であった。これは大杉の友人安成二郎をはじめとして新聞記者たちが懸命に探索して報道に持ち込んだ。山本首相からの圧力もあって9月20日には戒厳司令官の更迭，憲兵司令官らの停職などの処分が行われ，24日に甘粕大尉が軍法会議にかけられた際に初めて事件の内容が発表された。軍法会議は軍上層部の指令によるものかどうか，など本質的な点をさけて審理し，甘粕は有罪となったが，3年で仮出獄した。その後のことはよく知られているとおりである。亀戸事件は10月10日に警察が発表したものの，亀戸署に留置されていた平沢，川合らが騒いで制しきれないので軍隊に刺殺させたもので，戒厳令下の適法の行為だとして押しとおした。しかも遺体は警察で一方的に焼却し遺骨だけが遺族らに手渡され，遺体の状況は分からない

ままであった。

10月20日には自警団などの朝鮮人虐殺事件の発表が，朝鮮人も暴行を働いたとの報道と抱き合わせで始まった。それに先立って朝鮮人を殺傷した自警団などの検挙が行われたが，それはとくに顕著なものだけに限定し，ただ警察権に反抗したものは厳しく検挙するとの方針によっていた（「関東戒厳司令官掌司法事務日誌」『東京震災録前輯』p. 69，姜徳相ら編『関東大震災と朝鮮人』p. 367）。そして軍隊，警察など政府の責任になることは一切不問とされ，発表からも隠された。しかしそれには検挙された自警団や国家主義者の間からの非難の声があがり，そのため実際には形だけの処罰に終わった。

10月17日には中国人の王希天が行方不明になったことが新聞で報道された。これに先立って10月13日には上海の各新聞は前日到着した中国人罹災者の報告に基づいて東京府下大島町での中国人労働者173人惨殺の記事をのせた。ついで王希天事件を中心に調査していた僑日共済会総幹事の王兆澄も帰国し，その報告が10月17日の『中華新報』に掲載された。彼が10月25日までにまとめた被害調査によると総数324名，内死者275名，重傷47名，軽傷２名であった。中国の世論は憤激し，中国代理公使からの抗議があり，中国からは宗教家の調査団と，政府が調査委員に任命した元外交総長の王正廷ら一行とが来日した。しかし日本政府は，ごく少数の中国人が「誤殺」されたことを認めただけで，王希天は釈放後に行方不明になったと回答した。そしてその後も多数の中国人が行方不明になった事実は認めざるを得なかったものの，集団的に殺害されたということは否定し通したのである。

12月11日に開会された第47臨時議会では，質問に立った無所属の代議士田淵豊吉が我々に過ちがあったなら赤裸々に告白して朝鮮人，次に中国人に謝すべきではないかと問いかけた。ついで憲政会の永井柳太郎が朝鮮人虐殺事件とともに王正廷一行の来日とも関連して「支那人誤殺事件」について質問し，有りのままの事実を報道し，非とするところはこれを非として陳謝する勇気をもつべきだとして答弁を要求した。だが，各大臣からは，当時は非常の時期で，厳重な調査を進めたが未だ明らかでないという答弁しか引き出せなかった。

2

このように日本の当局が事件を隠蔽したのに対して，事件の真相を究明しようとする調査が，朝鮮人，中国人をふくむ民間有志のあいだで進められた。だがその活動は，警察や軍によって脅かされ，その発表は許されなかった。その代表的なものは朝鮮同胞慰問団の一員から聞いた朝鮮人被害者数を記した吉野作造「朝鮮人虐殺事件」で，これは改造社発行の『大正大震災火災誌』のために書いたものであるが，内務省の検閲で掲載されず，東京大学吉野文庫に保管されたままであった。これは後述の姜徳相・琴秉洞編『関東大震災と朝鮮人』(pp. 357-362) に収録されて広く利用できるようになった。朝鮮人虐殺事件のことは当時の人びとには漠然とながら広く知られたものの，これらの事件の真相を究明する仕事は圧迫され，それを明らかにした文章は極めて乏しかったのである。

そうしたなかで，震災の翌年早くに発表された『種蒔き雑記—亀戸の殉難者を哀悼するために—』(1924年1月20日) は，亀戸事件を中心にしたものであるが，朝鮮人と中国人の虐殺にもふれている。これは雑誌『種蒔く人』の同人が出したもので，事実上はその終刊号となった。これは前年10月に自由法曹団が関係者から聴取した「亀戸労働者刺殺事件調書」を，編輯発行兼印刷人である劇作家の金子洋文が抜粋して読みやすいように書き直したものであるが，その冒頭にある「平沢君の靴」は，調書の最初にある八島京一の2通の聴取書をまとめたものである。これには大島町事件の現場がでてくる。この調書は幾つかの本に収録されているが，『法政大学大原社会問題研究所資料室報』No. 138 (1968年) 所収の「自由法曹団作成亀戸労働者刺殺事件調書21通」が明細である。そこには同所の庶務日誌から「(大正13年) 2月12日東京亀井(ママ)戸事件に関する資料代百円加藤勘十氏宛電信為替にて送る (山名名義にて)」と入手経路も示されている。当時としては異例の高額である。

調書のほうで見ると，9月4日の朝，八島は三四人の巡査が荷車に石油と薪を積んで行くのに出会ったので，その内の顔なじみに聞いたところ，「外国人

が亀戸管内に視察に来るので，其死骸三百二十人を焼くので昨夜は徹夜した。鮮人ばかりでなく主義者も八人殺されたと云うて居りました。それで平沢君も居るのではないかと巡査にきいた方面の場所に行き見たる処，鮮人支那人等二三百人位の人間が殺して山に積んでありました。其近辺に平沢君の靴と思はるる靴が置いてありました」とあり，もう一通では，その場所を「大島町八丁目の大島鋳物工場の横で蓮田を埋立てた場所だ」と述べている。ただ9月4日朝という日付には問題がある。「平沢君の靴」はこれらの具体的な叙述をそのまま生かして，分かりやすくまとめている。しかしこの記述が，大島町事件の現場だということは，その後長く取り上げられないままであった。この『種蒔き雑記』は「この雑記の転載をゆるす」という前書きでも知られているが，戦後1961年に出た『種蒔く人』の復刻版にはいり，利用しやすくなった。

自由法曹団の中心人物の一人である山崎今朝弥も1924年に『地震・憲兵・火事・巡査』を出版した。これは中国人虐殺事件に直接ふれてはいないが，当局が大規模に宣伝した流言蜚語によって「朝鮮人の大虐殺となり，支那人の中虐殺となり，欧米人の小虐殺となり，労働運動者，無政府主義者及び日本人の虐殺となった」と記している。この著作も多田道太郎編『自由主義—現代日本思想大系18』（1965年筑摩書房）に収録されて入手しやすくなり，1982年には岩波文庫に収められた。

司法省の『震災後に於ける刑事事犯及之に関連する事項調査書［秘］』（『関東第震災と朝鮮人』pp. 371-449所収）の第6章「支那人を殺傷したる事犯」には「大島町八丁目付近に於て支那人百数十名の被害を伝ふるものあり，厳に之が調査を為したるも其の事跡明ならず」とある。すでに中国でも広く報道されていて無視できなかったために，とくにことわったのであろう。いわばアリバイ作りの記述である。大震災下の虐殺事件で当時問題になったものについては，政府部内かぎりの［秘］文書の中でこの種のアリバイ作りを行っている例がかなり多い。なおこの調査書では「今次の変災に際して欧米人に対する加害は一の認むべきものなしと雖，唯支那人に対する殺傷事犯を見るに至りたるは頗る遺憾とする所なり。調査の結果に依れば何れも支那人に対する反感に出でたるものに非ず。全く鮮人と誤認したるに因る」としており，その被害者数も死亡

3，重傷5をあげているにすぎない。

当時の政府機関や府県，市当局などでは震災後2，3年の間に震災誌などを発行したが，そのなかにも真相にふれる記録を収録したものもあり，また弁解のための記述であるが真相をうかがわせるものもある。この事件との関連では，とりわけ東京市役所編『東京震災録』が注目される。これは1926年に前輯・中輯・後輯，翌年に別輯と，B5版2段組，4冊計4400余ページにのぼる大冊で，東京市ばかりでなく，政府各省，東京府や民間の活動にもふれており，戒厳令で活動した陸軍省及び陸軍の部は前輯にある政府の活動のうち428ページを占め，別輯にも関係記事がある。

さきにふれたように，朝鮮人虐殺事件に関する研究が本格化したのは，戦後かなりたった事件40年後の1963年からであった。この年5月29日には労働運動史研究会の主催で震災40周年の研究集会が開かれ，7月にはその記録を含む『労働運動史研究』の特集号が出された。同じ月の『歴史学研究』には姜徳相「関東大震災に於ける朝鮮人虐殺の実態」が載り，『歴史評論』9月号は「日本と朝鮮—大震災朝鮮人受難40周年によせて」を特集し，羽仁五郎らが執筆した。『思想』同月号には綿密な論文である松尾尊兊「関東大震災下の朝鮮人虐殺事件・上」が載った（下は翌年2月号）。そして10月には各方面の厖大な資料を集めた画期的な資料集である姜徳相・琴秉洞編『現代史資料6・関東大震災と朝鮮人』がみすず書房から刊行された。

このなかには中国人虐殺事件にふれたものもある。松尾論文は，戒厳司令部参謀だった森五六が江東地区で中国人の土方二百人が日本人の土方に虐殺されたと語った談話をのせている。『関東大震災と朝鮮人』を抜粋した田辺貞之助『女木川界隈』（1962年）は大島町6丁目で見た中国人死体の残虐な殺害ぶりを記録している。少し後になるが，震災当時横浜の根岸に住んでいたねずまさしは『日本現代史4』（1968年，p. 226）で「中国人は横浜だけで百五十人殺された」と書いている。『東京日日』の記事によっているらしいが，その根拠ははっきりしない。ただ，どれもまだ事件を特定して追究してはいない。

さきの5月の集会では，姜徳相，南巌，戸沢仁三郎，秋山清とともに私も報告した。私が頼まれたのは，前年に『日本の百年5・震災にゆらぐ』を出した

ためであろうが，そこでの題名は「大震災下の三事件の位置づけ」であった。三事件とは，朝鮮人虐殺事件，亀戸事件，大杉事件のことであるが，この並べ方は気になったので，雑誌にのせた報告の題名は「諸事件」と直した。これについては，朝鮮人虐殺事件と亀戸・大杉両事件とは規模も意義も全く違うから，これらを三大テロ事件などと並列すべきではないとの姜徳相の批判があり(『関東大震災』)，まさにその通りである。だが，同時にまたこれらの諸事件のあいだの関連をどう見るかということは，これら諸事件の意義を考察するうえで重要である。

大震災の翌々年に警視庁が編纂発行した『大正大震火災誌』は，第5章を治安維持と題して，主に「朝鮮人の保護」や自警団の朝鮮人殺害事件，つまり朝鮮人虐殺事件に関連したことを述べ，その第5節要視察人に対する措置で，亀戸事件，支那人王希天行方不明事件，甘粕事件を並べてとりあげている。これは警察の観点からの区分であるが，後の三事件はいずれも直接に国家権力によって殺害・処分された事件で，分け方としては筋が通っている。しかもここでは，王希天の事件のことを，いわばアリバイ作りとしてであるにもせよ，とにかくあげている。さきの40周年研究集会では，王希天事件にも，また大島町中国人虐殺事件にも全くふれていない。そこには研究の浅さがあった。

中国人虐殺事件については，これより先にふれた史料もあり，調べる糸口もなかったわけではない。1960年の『自由思想』には安成二郎の正力松太郎談話メモがのっている。『読売新聞』は中国人虐殺事件の真相究明に最も活動した新聞であるが，経営不振のために買収され，皮肉にも震災当時の警視庁官房主事で虐殺事件に責任のある正力が財界の出資を得て翌1924年2月に社長となった。このメモはその10月に開かれた前編集局長千葉亀雄を招待した会での正力の発言で，大杉のことが中心であるが，最後に千葉が「正奇(ママ)天はどうしたんでしょう，軍隊では無いでしょうが」というと，正力は「王奇天か，ハハハ」と笑って何も言わなかった，とある。当時はかなり問題になっていたことが分かる。だがここには「王奇天」についてのコメントはない。

王希天は，東京中華留日基督教青年会つまり中華YMCAの幹事で，キリスト教関係者とくに救世軍の山室軍平らと親交が深く，中華僑日共済会の結成に

ついても山室の支援をうけており，それだけに王のことは当時は広く知られていた。日本の廃娼運動と山室軍平のことをとりあげた吉屋信子『ときの声』(1965年）は，このとき王希天が縛られたまま行方不明になったと知らせをうけ，山室が調べたところ労働運動の裏切り者渡辺某の手によって習志野騎兵隊の某中尉に引き渡されたことがわかったと記している。そこには誤りもあるが，事件の調査に来日した王正廷を迎えて山室と王希天を紹介した沖野岩三郎，伯爵陸奥広吉らが加わって開かれた追悼演説会のことも述べられている。

1969年には王希天事件当時の警視総監の伝記『湯浅倉平』が東大教授林茂の執筆で刊行された。その中には1942年に開かれた湯浅の追悼会で，事件当時の内務省警保局長だった岡田忠彦が述べた挨拶が引用されている。それによると，職についてみると亀戸で事件が起こっていた，朝鮮人は殺しても国の中のことであるからいいようなものの，中国人を殺したらしいので困ったと思っているうちに，中国から汪なんとかがやって来て現場を見るというのだ，仕方がないから，その辺の住民に警察から脅して口封じをしておいたが，その土地を掘ってみると「何と毛の生えている皮が出て来たんだ」，朝鮮人がそんな毛皮のついたものを着ているはずがないと迫ってきた，中国側に浪人か志士といった人物も加わって湯浅君を責める，さすがの湯浅君も困ってしまって，ややもすると本当のことを言いそうな顔をしていたが，日本人が外国人にさような虐待行為を加えるということになれば大きな差支えも起こりうるというので，正直な湯浅君も口をつぐんで，とうとう言いませんでした（p. 186)。岡田は湯浅より6年ほど後輩の内務官僚で，当時は衆議院議長であったが，戦時中だけに，朝鮮人にたいするひどい蔑視を丸だしにしているが，中国人殺害については案外率直にふれていて，思いがけないことも出ている。

中国人虐殺事件を主題として取り上げた最初の論文は，1972年の松岡文平の「関東大震災と在日中国人」と「もう一つの虐殺事件—関東大震災と在日中国人」とである。松岡は在日中国人の虐殺事件は，よく言われるように朝鮮人と間違えられて殺された「誤殺」ではないとし，当時の新聞記事と公刊の記録を丹念に利用してこれを追究した。そして10月21日付けの『東京朝日新聞』が中国公使館の調査として在留中国人の被害が殺害百六七十名，負傷百四五十名に

達しており，最も猛烈だったのは府下大島，ついで横浜郊外戸塚付近，月島および富川町辺であると報道した記事などから，大島町の集団殺害と王希天事件とを見つけだした。これは大阪歴史学会で報告され，神戸大学教授の山口一郎らの指導もうけ中国側の史料も利用して「関東大震災下の中国人虐殺事件について」(1974年）にまとめられた。『外事警察報』に訳出された史料が中心であるが，それにからんで外国人労働者問題としても考察している。

それと前後して『歴史評論』1973年10月号は関東大震災50周年の特集を行ったが，そのなかの小川博司「関東大震災と中国人労働者虐殺事件」はもっぱら中国側の史料を利用してこの事件を分析した。この論文は中国では事件の背景として，この年の21カ条反対運動で中国側が経済絶交運動を展開してあくまで抵抗したことに対するうらみと，中国人労働者移入制限に対する抵抗を圧殺するための暴力的なみせしめという二点をあげている。

この1973年10月には地方史研究協議会大会が大阪歴史学会との共催で大阪で開かれ，松岡はそこで東京の高梨輝憲から中国人虐殺事件を目撃した体験談を聞いたと最後の論文に付記しているが，高梨は翌年にこれを『関東大震災体験記』として発表した。それには，９月３日に大島町の南の進開橋のたもとで中国人殺害の現場を見たことと，９月４日に大島町八丁目の空き地に多数の朝鮮人，中国人の死体が運び込まれていたのに驚いたこととが記されている。彼は，大正11，12年頃多数の中国人が浙江省方面から行商人として来日し，これに交じって苦力と呼ばれた労働者も来て，深川辺で集団生活をして荷揚げ人夫などとして働いていた，いずれも支那服を着ていたので一目で中国人だとわかったが，進開橋付近で殺された男もこれと同じ服装をしていた，とも述べている。

ここで大島町付近の地理を述べると，当時の東京市は本所，深川両区までで，大島町はその北の亀戸町とともに南葛飾郡に属し，ともに亀戸警察署の管内であった。総武線が両国駅から亀戸駅へと走っている南側には，隅田川と中川を結ぶ竪川，さらに南を小名木川が東西に走っていた。亀戸駅の北から竪川までが亀戸町で，竪川と小名木川のあいだに挟まれた東西に長い地域が大島町で，深川寄りが１，２丁目，中川寄りが８，９丁目であった。小名木川の南は

砂町で，中川の向こうは小松川町であった。亀戸駅の西側の街道を南下して竪川にかかるのが五の橋，小名木川にかかるのが進開橋で，竪川が中川に流入するところで中川にかかっている橋が，あとで出てくる逆井橋である。

3

中国人虐殺事件の真相究明が急速に進んだのは，事件から52年後の1975年のことであった。震災記念日を前にした８月28日には，『毎日新聞』の夕刊が「王希天事件真相に手掛り／一兵士の日記公開」の見出しで，当時亀戸に出勤した野戦重砲兵第１連隊の兵士久保野茂次の日記が公開されたと報道した。当時聞いたところでは，２年前に震災50周年の亀戸事件の追悼会が開かれた際に，鎌ヶ谷市に住む久保野がこの日記を平和のために役立ててほしいと持ってきたもので，名を秘することを望んでいたが，同じ鎌ヶ谷市の石井良一が説得して公開の運びになったという。今回の記念集会で石井が語ったところでは，本来は翌日の『朝日』『読売』『毎日』の朝刊にのるはずだったが，『毎日』が抜け駆けをして夕刊に載せたために，他の２紙を掲載をとりやめたとのことである。この日記の関係部分はその直後に出た関東大震災50周年朝鮮人犠牲者追悼行事実行委員会編『関東大震災と朝鮮人虐殺』(1975年９月）で発表された。

久保野は野戦重砲兵第１連隊の第６中隊の一等卒で，市川町国府台の兵営で大地震にあい，９月２日未明から救援活動のため小松川，大島町方面に出動した。そして一旦ひきあげたのち，３日午前１時頃，こんどは「不逞鮮人」の鎮圧の目的で出動し，在郷軍人らの朝鮮人虐殺の様子を見たり，多数の朝鮮人を収容したりした。大島町事件のことには直接ふれてはいないが，のちの９月29日の記事に，岩波少尉らが震災地警備に出動した際に「小松川にて無抵抗の温順に服してくる鮮人労働者二百名も兵を指揮し惨ぎゃくした」その殺し方も残虐であまり非常識すぎはしまいかと評判だという記事がある。９月５日からは朝鮮人，中国人を習志野演習場に護送するため亀戸駅前の「支鮮人受領所」に勤務し，そこで王希天の活動に接していた。10月18日に新聞が王が行方不明になったとの記事を載せると，久保野はその切り抜きを日記の欄外に張り付け，

「王希天君は其の当時我中隊の将校等を訪い支人護送につき労働者のために尽力中であった…支那人として王希天君を知らぬものはなかった」と悼み，翌日の日記に歩哨させられていた兵から聞いたとして，第6中隊の中隊長らが王を誘い，逆井橋の鉄橋のところにさしかかると，待機してした別の将校が斬り殺してしまったと日記に書き留めている。この日記は王殺害の真相を明らかにすると同時に，さまざまなことを引き出す手掛かりとなった。

この久保野日記の公表と前後して，私は米軍の日本占領中に米国議会図書館と国務省とが作った『日本外務省文書マククロフィルム』の中の「本邦変災並びに救護関係雑件：関東地方震災関係」の巻を入手した。米国が占領中に作ったマイクロフィルムはこれと『旧陸海軍関係文書マイクロフィルム』である。『関東大震災と朝鮮人』には後者から多くの史料が採録されている。私は中国人虐殺問題は外交問題になるから外務省文書の中に史料があるはずだと思って，目録で見て注文したのであるが，果たしてこれは「大島町事件其他支那人殺傷事件」という綴りで，大島町事件と王希天事件に関する重要史料であった。今日では外務省外交史料館に行って確かめればいいと思われようし，事実同館ではもっと多くの関連の綴りを閲覧できるが，当時は，戦後の史料公開の歴史を考えて，できるなら官庁以外のところでまず史料を探したいと考えたのである。

この綴りの最初の文書が「支那人に関する報道・九月六日警視庁広瀬外事課長直話」で，その最初の項目が「大島町支鮮人殺害事件」となっている。内容は後述するが，軍隊も加わって集団虐殺を行ったことを日本の当局者がはっきりと認めた極めて稀な公文書である。ここにある文書の多くには極秘の印が押され，幾つもの花押が書かれている。

これにこの事件と王希天事件のことが中国で発表され中国政府から抗議をうけたのに対処するための文書が続く。なかでも圧巻なのは守島伍郎事務官が筆記した「王希天問題及大島町事件善後策決定の顚末」など一連の記録で，この綴り自体が守島が執務用に関係書類を綴じ込んで作ったもののように思われる。これに警視庁の関係調査や幾種類かの佐々木大尉の答弁の草稿も含まれている。ついで中国から派遣された調査団との会議録とその関係文書が入ってい

る。これには水野梅暁が伴ってきたキリスト教牧師兪顕庭，仏教僧徒包承志・顕蔭と湯浅警視総監および田中義一陸軍大臣との会見記と，王正廷とともに北京政府の調査委員として来日した沈其昌，劉彦と出淵勝次亜細亜局長との会議録とがある。さらに虐殺事件に関する中国青年会と留学生の調査，小村俊三郎ら民間有志の「支那人被害の実地踏査記事」と外務大臣への上申書，「支那人殺傷事件に関する支那側の調査及び世論」などが入っている。さきの「顚末」には（追て焼捨てること）という断り書きがあるが，この綴りが日本政府による敗戦後の焼却を免れ，しかも米国側でこれを選んでマイクロフィルムに撮影していたことは，偶然の幸せであった。

さきにあげた『関東大震災と朝鮮人虐殺』では，第1部大震災と朝鮮人虐殺の真因の究明を斉藤秀夫と私とが共同執筆し，大島町事件と王希天事件の部分は私が久保野日記とこの外務省文書を用いてまとめた。私は，ついで「大島町事件・王希天事件と日本政府の対応」(1976年）を書いて，政府の隠蔽工作と民間有志の真相究明のための努力について詳細に述べておいた。

これをまとめた直後に私は久保野家をたずねたが，久保野はこの日記をぜひとも王希天の遺族に見せ，その死を悲しんだ者のいることを伝えたいとの強い願いを漏らしていた。私は昨（1991）年瀋陽で開かれた九・一八事変60周年記念シンポジュームに出席したが，出発直前に幸運にも仁木ふみ子から長春にある長男の王振圻の住所を教えられた。そして吉林省社会科学院歴史研究所員のお世話でその家を訪ね，久保野の願いをおもいがけず果たすことができた。だが残念なことに久保野はすでに亡くなっていた。

関東大震災60周年の1年前の1982年8月末には，田原洋『関東大震災と王希天事件—もう一つの虐殺秘史』が刊行された。この本は，関東大震災当時に久保野が所属していた野戦重砲兵第1連隊の第3中隊長だった遠藤三郎の「爆弾証言」から書き起こされている。戦争中の動員学徒や女子挺身隊員などの写真に日の丸に「神風」と書いた鉢巻きを締めたものがよくあるが，これは太平洋戦争中には陸軍中将で軍需省航空兵器総局長官だった遠藤が長官の機密費で百数十万本作って配布したものだという。遠藤は戦後日中友好運動に参加し，自伝『日中十五年戦争と私—国賊・赤の将軍と人はいう』(1974年）を出版してい

るが，これは震災当時のことにはふれていない。角田房子『甘粕大尉』(1975年7月）は遠藤三郎から野戦重砲兵第7(ママ)連隊の将校たちが「王奇天」を殺したことや事件をウヤムヤにした当時の雰囲気にふれているが，久保野日記が発表される1カ月前に出版されており，王希天のこともよく分からず，的確とはいえない。角田はのちの中公文庫版でこのことをことわっている。

『東京タイムス』の記者だった田原は，遠藤と王希天を斬った将校にインターヴュウして証言をとったほか，王の第一高等学校特設予科や第八高等学校時代の友人たちから広く回想を求め，その多くが無関心だったり中には反感さえも示すなかで，元最高裁長官でハト派で知られる横田正俊が王のことを懐かしんだ1971年の文章を発掘している。山室軍平との親交にもふれ，12月20日に救世軍本部で行われた追悼式で山室が述べた切々たる弔辞の草稿のメモを，その子の山室民子が亡くなる直前に見つけてくれたとして載せている。この式には志立鉄次郎元日本興業銀行総裁や後出の小村俊三郎，河野恒吉も出席していたという。

この本は，王希天事件については，野戦重砲兵第3旅団で王の殺害を決定する経緯と，10月に事件が問題化してから後の隠蔽工作を詳しく述べていて注目されるが，この部分はノンフィクション・ノベルの形式で書いたと自ら述べていて，史料的な裏付けが判らないところに問題がある。また田原は東京都公文書館で，ガリ版刷りで全体で2300ページにのぼる『関東戒厳司令部詳報』を発見して，これを紹介している。これは「機秘密に渉るものは別冊」としているのに，本文からも第11章がタイトルごと切り取られているが，そのタイトルは別の書類でみると「外国人及び社会主義者に関する事項」であった。そしてその第4章行政及び司法事務にある兵器使用の実例の中から，久保野日記にあった岩波少尉の部隊が大島町事件に関与していることを捜し出している。これらの点については後述する。

1985年には遠藤三郎の日記をもとに要所を抜粋してまとめた宮武剛『将軍の遺言』が『毎日新聞』に連載され，翌年に刊行された。関東大震災が起こった時帰省中だった遠藤は急ぎ帰隊し，9月5日には第3中隊長から旅団の増加参謀に招致され，そこで王希天事件にぶつかる。日記にも事件の内容は書かれて

いないが，人の動きだけは判る。日記には1967・10・3付けの遠藤の後記があり，事件のことが簡単に記されている。本書ではそこで踊った軍人たちのその後のつながりも描き出していて興味深い。

1980年代を迎える頃から，東京都その周辺の地域で，朝鮮人虐殺事件の掘り起こしが，教員や自治体職員や主婦などの市民の手によって進められるようになった。千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会は，地域での聞き取りを進めて，同年とその翌年とに『関東大震災と朝鮮人』に関する2冊の資料集を出した。それらは「船橋市とその周辺で」と「習志野騎兵連隊とその周辺」という副題で，習志野廠舎に「保護収容」された朝鮮人の中から日本の権力者に反抗的な「不逞者」を選び出して殺害したり，周辺の村にくばって虐殺させていたというショッキングな事実も聞き取りされている。収容所で中国人が殺害されたことや，管理当局とも話して収容者の自治活動を計ったところ睨まれて九死に一生を得たことなども聞き書きされている。

関東大震災60周年の1983年にはこれらを集成した同会編の『いわれなく殺された人びと』が出版された。この年の11月には『季刊三千里』冬号が関東大震災の時代を特集し，安岡章太郎，金達寿らが寄稿しているが，その中で山田昭次は，10年前に刊行された『かくされていた歴史—関東大震災と埼玉の朝鮮人虐殺事件』が日朝協会埼玉県連が中心だったのに較べて，それが市民たちの運動として進められるようになったのは大きな変化だと評している。東京では，関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し慰霊する会が活動し，現地での調査に加えて韓国への聞き取り旅行なども行って，遺骨の発掘をめざしており，中国人虐殺事件のことも取り上げている。最近，会名の最後のところを…追悼する会と改め，1992年7月には『風よ鳳仙花の歌をはこべ』を刊行し，中国人虐殺事件についてもまとめて述べている。

こうした動きに対応するかのように，昨1991年には仁木ふみ子『関東大震災中国人大虐殺』が出された。仁木は上海の新聞報道などの中国側の史料を見てこの事件を知り，研究を始めた。吉林の豪商の家に生まれたエリートである王希天のことを調べるだけでなく，出稼ぎにきていた辛うじて生き残った労働者やその遺族たちを浙江省南部の温州の奥地に尋ねてその話を聞くなどの努力を

重ねて，被害者から見た事件の状況を追っている。そして事件については外国人労働者問題としての面を重視している。すなわち中国人労働者を警戒していた警察と，これを競争相手として敵視していた人夫頭とが，人夫たちを扇動して組織的に起こしたことを強調する。そして権力の扇動に乗って狂気の暴徒と化した日本の民衆の意識やあり方を批判し，その底には根強いアジア人蔑視とそれと結び付いた人権感覚の欠如とがあるとする。しかもそうした体質は今日なお続いており，外国人労働問題にはっきりと現れていると警告する。

仁木は，こうした批判を通じて虐殺されたり，されかかった中国人労働者の故郷の人たちと日本人の間に新しい結び付きを作り出そうと願っている。そしてこれら労働者の故郷に近い温州市には彼らのために活動した王希天の殉教記念碑が建てられていたが，それが戦時中に日本軍によって倒されたままになっているのを再建し，遺族たちのための教育基金を設けようとする運動を呼びかけている。

最近では中国人虐殺事件に対する中国での報道・告発の研究やこの問題を外国人労働者問題としてとらえようとする研究が活発になっている。横田豊「関東大震災下の中国人虐殺事件の告発」(『青山学院文学部紀要』32号1990年）には中国で発表された被害者一覧がある。日本政府と中国側の間に立った水野梅暁の文書も調査中とのことである。

4

これまで関東大震災下の中国人虐殺事件について，隠蔽された史料が発掘され，事件が明らかにされた課程をクロノロジカルに追ってきた。そこで，次にこれらの史料を通じて主な問題点がどのように解明されたのかを考えてみよう。

まず大島町事件については，「平沢君の靴」のもとになった「調書」と高梨の『体験記』とは朝鮮人・中国人の死体の折り重なった大島町８丁目の現場を記録している。前者はさきに引用したとおりで，４日朝に巡査に逢い昨夜徹夜して死骸を焼いた話を聞いたとしている。高梨は当時東京市連合青年団員で団

服を着て災害地をまわっていたが，４日の朝に大島町８丁目の広場で前日午後から運び込まれた三百体もの男女の惨殺死があるのに驚いた。その日も出掛けて翌５日の夕方に帰り着くと，巡査が人びとの通行を制止しており，その理由を聞くと巡査は今夜広場の死体に石油をかけて焼くのだといい，支那人も沢山交じっているが，後になって国際問題にでもならなければいいが，と語ったとのことであった。高梨の日付の方が連日行動しているので正確で，平沢らが検束された３日の夜が混乱を極めたとされていることからも，「調書」の４日朝というのは早すぎ，少なくとも１日ずれているように思われる。

これらが死体が積み重なった現場の状況を述べているのに対して，事件綴りの警視庁広瀬外事部長直話はその殺害状況と対策にふれている。事件を明らかにするために少し長く引用すると，「目下東京地方にある支那人は約四千五百名にして内二千名は労働者なる処，九月三日大島町七丁目に於て鮮人放火嫌疑に関連して支那人及朝鮮人三百名乃至四百名三回に亙り銃殺又は撲殺せられたり。第一回は同日朝軍隊に於て青年団より引渡しを受けたる二名の支那人を銃殺し，第二回には午後一時頃軍隊及自警団（青年団及在郷軍人会等）に於て約二百名を銃殺又は撲殺，第三回には午後四時頃約百名を同様殺害せり。右支鮮人の死体は四日まで何等処理せられず，警視庁に於ては直に野戦重砲兵隊第３旅団長金子直少将及戒厳司令部参謀長に対し右死体処理方及同地残留の二百名乃至三百名の支那人保護方を要請し，不取敢（とりあえず）鴻の台（国府台）兵営に於いて集団的保護をなす筈となりたり（以下略）」というものである。

同じ事件綴りにある「支那人被害の実地踏査記事」は，11月18日に中国からの宗教家の調査団と同行するような形で，外交官出身の読売新聞記者小村俊三郎，陸軍予備少将で朝日新聞客員の河野恒吉，牧師丸山伝太郎が大島町を調査して作成したものである。同じ綴りには古森亀戸警察署長が小村らの行動を調べて警視庁官房主事にあてた11月22日付けの報告書があり，大島町８丁目の電気機械修繕業，木戸四郎が読売新聞記者らに語った話を次のように報告している。「九月三日正午より軍隊約七名が五名の鮮支人を現場に於て撲殺せるを手始めに，続て二，三丁目方面より支那人を参々伍々連行し撲殺し，午後六時迄に約弐百五拾名を軍隊・自警団・警察にて惨殺せるものにして，屍体は現場に

於て田中と称する人夫が数人の人夫を使役し石油約三十缶を以て焼却し骨灰は地盤五寸余を削り取り荷馬車数台に積載し何れにか投捨せるものなり。何れも警察の指揮の許に行い署長は自動喞筒に乗じ現場を監視せることあり。之の虐殺の原因は何れも警察官の宣伝にして当時は警察官の如きは盛に支鮮人は見付け次第殺害すべしと宣伝せり」と。ここには警察の役割も述べられているが，死体焼却の日時は明確でない。

小村らの踏査記事によると，小村らがまず大島町３丁目の華工共済会元事務所に行くと，既に事務所は撤廃されて日本人が居住し，６丁目裏通りの中国人労働者の合宿所７軒もすべて日本人避難者が占領していた。そこでの話は「三日早朝二発の銃声があり，集合の合図とも曰えり，次で剣付鉄砲の兵士二人裏長屋に来り支那人をことごとく其合宿所より裏通りを経て何れにか引立て行き，多数の民衆も兵士二人と共に之を囲繞し行きたり」ということで，軍隊が中国人労働者を合宿所から引き立て，警察も加わって民衆と共に虐殺したことが明確になったとする。虐殺の事実については，木戸と思われる目撃者の実話を警察の報告よりも詳細に伝えている。ここには死体は「九月五日頃亀戸署より土方の親分田中某なるものに命じ」２日間にわたって一物も残さぬよう焼き尽くしたとある。

小村らは「逆殺の惨状は真に言語に絶し支那新聞紙の記載と符合するのみならず却って其以上に出で，支那の労働者を現場に誘致し民衆と共に之を屠殺し而して其証拠を隠滅するに皆な軍隊警察の加わり居る確証を的知し…既に三ケ月に垂んとするも司法官は未だ曾て犯罪の調査にすら従事したる形跡なき等驚くべき事実を発見せり」と政府の責任を問い，「我官憲の参考に資する」ために大要を記述したと述べ，３人の署名でこの報告書を翌年１月に松井外務大臣に提出したのである。

次に，ここで虐殺にあたった軍隊はどの部隊なのか，問題になる。この地域に９月３日ごろ出動した軍隊は，特定できないことはない。さきに述べた『東京震災録』の陸軍省及陸軍の部をみると，各部隊の活動状況が分かる。大地震が起こると東京衛戍司令官代理の石光第１師団長が１時すぎには非常警備に関する命令を出し，中央線―新宿―四谷見付―日比谷公園―両国橋―総武線の線

を含め，それより以北は近衛師団，以南は第1師団の警備区域とし，翌日戒厳令が発布されたのちも，ほぼこの線が東京北警備隊と南警備隊の境界となった。亀戸町の大半は近衛師団，同町の総武線より南と大島町，砂町などは第1師団の警備地域である。亀戸事件で労働者を刺殺た騎兵第13連隊は近衛師団で，久保野の所属した野戦重砲兵第1連隊は第1師団の野戦重砲兵第3旅団の所属である。もっとも震災直後の救援活動などでは必ずしもこの境界線にとらわれずに活動している。中隊以下の小部隊の状況は全体的にはつかめないが，野戦重砲兵第1連隊から出動した救援隊の活動は，別輯にある勲労者の勲功具状にかなり詳しく記されている。

9月3日には第1師団の騎兵第14連隊が午前1時亀戸付近を警備し，ついで大島町と亀戸駅南側の警備に当たり，午後8時に北警備隊に復帰した。他方，野戦重砲兵第3旅団（同第1，第7両連隊）は本所深川から小松川方面にかけて「治安維持及避難民の救護」に当たり，これに第3歩兵連隊の一部が増援されている。この日第1師団長は「各所散在の支鮮人を収結保護して禍根を除去する必要を認め」，これを陸軍習志野演習廠舎に収容する意見を戒厳司令部に提出し，翌4日に戒厳司令部の命で大島区方面警備の野戦重砲兵第3旅団長に東京市東部散在の「鮮人保護」と習志野廠舎への護送の意図を指示した。「支鮮人」という言葉は，久保野日記にはよく出てくるが，『東京震災録』には最初の一か所だけで，他のところは「支」という言葉はすべて隠されている。『将軍の遺言』によると，5日早朝に旅団の増加参謀とされた遠藤はすぐに戒厳司令部に習志野送致のための交渉に出掛けている。

この中から大島町事件に関わった軍隊を見いだすのは難しいが，そのカギは田原が見つけた『詳報』の兵器使用の実例の中にあった。それには「九月三日午後三時頃。大島町八丁目付近。野重一ノ二岩波清貞少尉以下六十九名，騎一四三浦孝三騎兵少尉以下十一名。兵器使用者騎一四騎兵卒三名。被害者鮮人約二百名（氏名不詳）」「概況　殴打」とあり，記事として「大島町付近人民が鮮人より危害を受けんとせる際，救援隊として野重一の二岩波少尉来着し，騎一四の三浦少尉にたまたま会合し，共に鮮人を包囲せんとせるに，群衆及び警官四，五十名，約二百名の鮮人団を率い来り，その始末協議中，騎兵卒三名が鮮

人首領三名を銃把をもって殴打せるを動機として，鮮人の群衆及警官と争闘を起し，軍隊之を防止せんとせしが，鮮人は全部殺害せられたり」とあり，備考には「①野重一の二将校以下六十九名，兵器を携帯せず　②鮮人約二百名は暴行強姦掠奪せりと称せられ，棍棒，鉈等の凶器を携帯せり　③本鮮人団，支那労働者なりとの説あるも，軍隊側は鮮人と確信し居たるものなり」とある。この内容には一見して嘘と判ることが多いが，さきの広瀬直話とほぼ対応し，備考も持って回った嘘で，他のごまかし方と一致している。

『東京震災録』（別輯p. 898）の「勲労者」の項には，岩波少尉以下69名の第4救援隊は，2日小松川をへて深川方面で活動し，3日午前6時ごろには大島町の進開橋付近に集結し，付近の製粉会社の小麦粉の払い下げに協力したとある。この活動状況とは矛盾しない。大島町事件に岩波少尉が関わっていたとすると，久保野はそれと知らずに，大島町事件のことも日記に書き留めていたことになる。

『詳報』のこの部分は正確には「付表，震災後警備の為兵器を使用せる事件調査表」となっており，20の実例が挙げられている。ところでこの実例の中には9月4日午後7時頃亀戸警察署構内で騎13騎兵少尉田村春吉の指揮で自警団員鈴木・木村・秋山ら4名を刺殺した事件や同5日午前3時頃同所で騎13騎兵中尉安東貞雄の指揮で河合義虎ら10名を刺殺した事件など周知の事件が多く，千葉県での6事件は，千葉県下で検挙された自警団員が軍人も殺害行為を行ったと陳述したため取り上げられた事件で，いずれもさきの司法省の『調査書』で適法行為だったと認められるとして記載されている。すると，これらの記載も，隠し切れなくなった事件のアリバイ作りであり，この岩波少尉の事件もその一つで，そのため持って回った嘘が記載されたものと考えられる。

5

次に王希天事件について見よう。王希天は9月9日にかねて相談相手になっていた中国人労働者の状況を視察，慰問するために早稲田鶴巻町の宿舎から大島町に出掛けたが，直ちに軍隊に捕らえられた。その12日までの動静は，『事

件綴り』の「支那人殺傷事件に関する支那側の調査及び世論」に僑日共済会総幹事の王兆澄の報告（10月17日中華新報所載）があり，その聞き取り調査で判明する。12日に殺害された経過は久保野の日記で明らかにされた。この殺害は久保野の所属する第6中隊の中隊長で「支鮮人受領所」の長であった佐々木大尉らによって行われたが，『事件綴り』にはアリバイ作りのための佐々木の供述文案が幾通りもあり，これも側面から経過を明らかにする助けとなる。なお久保野日記の11月28日の項には午後佐々木中隊長が講話し，その「最後に震災の際兵隊が沢山の鮮人を殺害した，其事につきては夢にも一切語ってはならないとかたくことわられた。其れについては中隊長殿が殺せし支那人に有名なものあるので非常に恐れて兵隊の口をとめてると一同の察した」とある。

さらにすすんで，王がなぜ殺害されたのかということになると，それが第6中隊の将校らの独断でではなく，旅団指令部と協議して行われたことは，幾通もの佐々木の供述文案と「一師報第19号」（9月12日午後9時第1師団司令部，東京都公文書館所蔵）に「支那思想団の一部亀戸付近に潜入し何等か画策せる形跡あり（3SAB［野戦重砲兵第3旅団］報告）」とあることなどから推測できる。それ以上にこれを明確にするような史料は，見当たらないが，田原の著書は，上述のように根拠がはっきりしないという問題はあるが，この点を追求している。

これによると，野重第3旅団で朝鮮人・中国人の「保護検束」の責任者だった中岡弥重野戦重砲兵第7連隊長が旅団の責任で王を処断することを主張し，亀戸署から「排日支那人の巨頭」と聞かされていた佐々木第6中隊長もこれに同調し，王の殺害が決定されたとする。田原の判断では，この時点ではまだ朝鮮人や中国人，とくに排日派の大物を処断すれば手柄になると考えられており，それが最大の原因であるが，かねて警察が王を要視察者としてマークしており，さらに地元の人夫差配師らが王の中国人労働者共済事業に反感をもち，仕事にあぶれた日本人労働者たちにも敵意を吹き込んでおり，かれらが軍隊に告げ口したことが，その引金になったのであろうとしている。

ところで，佐々木の第6中隊も，遠藤の第3中隊も，ともに野戦重砲兵第7連隊ではなくて，同第1連隊の所属であり，連隊長は中村興麿大佐であった。

だが中村連隊長のことは全く出てこない。田原は，今度の記念集会で次のように述べている。この部分をノンフィクション・ノベルの形式で書いたのは，遠藤の談話に専らよったためであるが，遠藤の記憶と判断の適正なことには定評がある。旅団は陸軍大学出のエリートである中岡連隊長と中隊長クラスのやはり陸大出のエリートである遠藤ら数人とが牛耳って重要な決定をおこなっており，中村連隊長は当時はいわば窓際族で，あまり発言力はなかった，という。中岡が朝鮮人・中国人の「保護検束」の責任者だとすると，「支鮮人受領所」の責任者である佐々木大尉は中岡の命令をうけて行動していたのかも知れない。遠藤が日記に付した後記のメモでは，王希天を最初に逮捕したのは野重第7連隊である。なお中村連隊長は長く法政大学の総長だった中村哲の父君で，「技術将校で兵器の製作者であった父は，このころ現地連隊に出され，幻滅を感じて，宇垣の軍縮方針に賛成して自分からやめました」という手紙をいただいている。

これらの事件は10月13日以降中国で大問題となり，22日付けで中国代理公使が抗議してきたのに対して，日本政府が徹底した隠蔽工作をおこなったはすでに述べた。この『事件綴り』はまさにこれに対応するために作られたもので，守島の書いた「顚末」には，10月29日に岡田忠彦警保局長がこの問題で出淵外務省亜細亜局長を来訪したことから始まり，11月7日の閣議散会後に後藤新平内務，伊集院彦吉外務，平沼騏一郎司法，田中義一陸軍の4大臣が協議中に山本総理も参加して徹底的に隠蔽する方針を決め，続いて警保局長の召集で警備会議が開かれ，この方針に基づき実行方法を決める経過を詳しく記している。5大臣会議が突然開かれたのには，「7日朝刊読売新聞の本件に関する記事があずかって力ありと思わる」とされている。この事件で最も活躍した読売新聞のことについては，拙稿も田原・仁木の著書もそれぞれにふれている。

警備会議では出淵外務省亜細亜局長が政府としてはあくまで加害当時の状況不明ということで押し通す覚悟が必要だと述べると，湯浅警視総監は頗る沈痛な態度で，本官の未だ際会せざる重大問題で「本件の隠蔽又は摘発，何れが国家の為め得策なるかは，自分としては確信無之」，政府が決定した隠蔽の方針を体して最善の努力をするが，自分の苦衷は充分推察されたいと述べている。

岡田本人が召集したのだから当然のこととともいえるが，さきに引いた『湯浅倉平』にある追悼会で岡田が述べたことは，20年近くも前のこの会議の雰囲気を伝えている。

これに先立って陸軍部内では10月初めに王希天事件の処理が問題となり，法務部から佐々木大尉の出頭を求めてきたが，遠藤はこれに付き添って戒厳司令部に行き，阿部信行戒厳参謀長と協議して事件のもみ消しをおこない，中国から抗議があったのちも同様の役割を果たした。こうしたことは田原と宮武の著書に詳しい。遠藤の名は『事件綴り』には全く出てこないが，そこで佐々木のアリバイ作りのための覚書作りを実際におこなったのは遠藤であった。

ここに登場する人物は，いずれも大物で，その後の日中関係に重要な役割を果たしている。陸相の田中はやがて首相となり，張作霖爆殺事件にいたる一連の出兵政策を進めて日中関係を悪化させた。法相の平沼，戒厳司令部参謀長の阿部は第1次近衛内閣のあと相ついで首相となり，戦争政策を推進した。外事部長の広瀬は平沼内閣の厚生大臣になった。警視総監の湯浅は，政変の際に後継首相候補の推薦にあたる天皇側近の重職である内大臣になり，穏健派ないし親英米派として攻撃された。この中ではなんら抵抗できなかったとはいえ，湯浅が一番良心的に悩んでいるように見える。

最後に，こうした中国人虐殺事件の原因について考えよう。この事件が朝鮮人虐殺事件によって軍隊・警察も民衆も暴徒化した状態のなかで引き起こされたものであるが，中国人が虐殺の目標とされた理由としては，一つには，おりから中国では21カ条条約廃棄・旅順大連回収運動が高まり，日貨ボイコットが激しくなっていたことに対する反発や怒りがあり，も一つには流入する中国人労働者の増加によって日本人労働者の職場が奪われたり賃金が引き下げられたりすることにより反感や敵意があり，それらが混乱のなかで挑発され，暴発したと考えられる。この2点はさきの小川論文で中国で事件の背景としてあげられていることでもある。

「支那人殺傷事件に関する支那側の調査及び輿論」に載った王兆澄の報告（10月17日中華新報所載）は「18日王兆澄又大島に到る時1丁目に於て日本労働者の首領佐藤に遭う。…彼の言に拠れば日本労働者頭領等は王希天を痛恨す。是

れ一．王が平常支那労働者を幇助するに因り，二．共済会役員に日本人を用いざるに因り，三．日本労働者頭領の意見を聴かざるに因ると」と述べ，さらに「主として支那人を使役せる日本労働者の頭領林某亦打殺され其他三人の頭領亦其の行方を知らず」と付言している。最近の研究はこの事件を外国人労働者の問題として追究している。

田原は，亀戸警察署構内で平沢，河合らに先だって軍隊に殺害された自警団員のうち秋山藤次郎に注目し，彼が石炭仲買兼人夫差配人で中国人多数をかかえていた人物で，亀戸署の刑事から中国人百人を解雇して日本人を使うように迫られ，これを拒否しつづけていたとの10月14日の『報知新聞』記事を紹介し，そこにも中国人労働者問題の影を見いだしている。

また田原は外務省文書などから僑日共済会を調べ，「外国人の動静雑纂・府県報告の部・支那国人」の綴りから王希天に関する何通かの文書を見いだした。大正12年２月１日大阪府知事発，中華民国僑日共済会長来阪に関する件は，王が共済会支部設置のため大阪中華総商会会長を訪ね，大阪府外事課長にも了解を求めにきたので言動を注意視察中と報じている。これに付された「共済会簡章」は，同会の目的とする事業は対内的には衛生状態改善，不法行為禁止絶滅，失業者病災者扶助，日本語習得・職業教育・道徳教育で，対外的には職業斡旋照会，会員の契約・交渉の代行，その他会員の利益になる事業だとし，日中有志から寄付を募り，会員から月30銭の会費を集め，学生達がボランティアで事業にあたる仕組みにしていた。

仁木は深川から大島町にいたる現地を詳しく調査し，当時の中国人労働者と日本人労働者の状況などを明らかにすることで，事件に迫っている。記念集会での報告を，私なりに再構成すると次のようになる。震災による本所，深川の火災は１日夕刻に横十間川を越えて郡部の亀戸，大島，砂町に燃え広がり，小名木川の辺では進開橋に迫って鎮火した。大島町では１丁目の過半と２丁目の一部が焼けたが，その先は焼け残った。この地域には10万人を越える罹災者が避難してきて，泊まる場所もなく不安な状況であった。仁木は中国人が経営する宿舎の位置を地図に書き込んで示し，次のように推察する。深川方面などで焼け出された中国人労働者は仲間を頼って焼け残った宿舎に収容された。２日

夜からの朝鮮人虐殺のあと，警察と「人夫頭」は，中国人労働者に反感をもつ日本人労働者をそそのかして，宿舎にいる中国人を組織的に連れ出し，軍隊も加わって虐殺し，そして宿舎ごと乗っ取ってしまったのではないのかと。中国人に対する差別意識と宿舎にいることへの嫉妬心とが挑発され，「中国人のくせに生意気だ」という無法な攻撃となったということが考えられる。

この事件のあと9月15日から1カ月半の間に中国人労働者4131人が日本政府によって本国に無料送還されたことについては田原の著書でふれている。また「行方不明」とされた中国人に対する日本政府の補償案とそれが結局実現されなかったことについては，仁木の本が詳しい。

いま一つの問題としてあげられるのは，21カ条条約廃棄・旅順大連回収運動とそれに伴う日貨ボイコットに対する日本人の反発や怒りである。この事件はボイコットが大規模だったばかりでなく，中国の国権回復運動が日本の権益の根幹である「満州」にまで及んできたことで，日本の支配層にも世論にも強い衝撃を与えた。議会で強硬論の立場から外交政策が批判され，貴族院で外交刷新決議案が議決されたばかりでなく，『東京朝日新聞』も中国自体が動乱の渦中にある今日，この排日運動は自らの墓穴を掘る愚挙であると非難した。軍部はこれを勢力復活の手掛かりにしようとしていた（拙稿「大正期における軍部の政治的地位」下『思想』1957年12月号」)。戒厳令で出動した旅団の幹部が王希天をそれと知って殺害させたことの背景には，こうした危機感もあったのであろう。さきの司法省の調査書が上述のように，殺傷事件は調査の結果「何れも支那人に対する反感に出でたる者に非ず」と特にことわっているのも，問題のあることを言外に語っている。当時の民衆感情の一端を示すものであろう。

おりから東アジアの国際情勢は動き始めていた。1923年1月にはソ連極東代表ヨッフェが中国広東政府の孫文との共同宣言をだし，ソ連が中国の国民革命を支援し，孫文は中東鉄道の中ソ共同経営を承認した。やがて山本内閣の内相となる後藤新平は当時の加藤（友）内閣の妨害を排してヨッフェを日本に招き，日ソ復交に乗り出していた。山本内閣ができて犬養毅が逓信大臣になると，孫文は中ソ日の提携をよびかけた。王正廷の来日目的の一つは，日ソ交渉の経過を探って中ソ交渉に役立てようというにあった（『日本外交文書』大正12

年第1冊』p. 663)。ソ連の東アジア復帰と中国国民革命の進展という新たな情勢に日本がどう対応するかが，この時期の極めて重要な課題であった。

この時期は大正デモクラシーの曲がり角であり，労農運動と社会主義運動とが民衆の間に影響力を強めようとし，日本の労働運動が在日朝鮮人の労働運動とが手を結ぼうとするきざしも生まれていた。王希天の活動も中国人労働者と日本の社会事業家とを結びつける役割をもっていた。それに対して権力の取り締まりや反動団体の動きも強まっていた。震災の混乱の中で権力の主導で起こされた朝鮮人虐殺，中国人虐殺，社会主義者虐殺の諸事件はこうした運動と民衆の間にくさびを打ち込むものであった。

こうした事件の真相を究明し，過ちを明らかにすることによってこのくさびを抜き取ることができるか。それはこうした運動にも，日本の民衆にも課された課題であり，その解決いかんは日本の進路に大きな影響を及ぼすものであった。そこでの動きはもっと深く研究する必要があるが，当時の日本人はこれらの事件について国民的な反省をするにはいたらなかった。関東大震災と戒厳令とは縮まりかけていた軍閥の力を伸ばした。既成の秩序や権益に対する問いかけには耳をふさいで，これを力で守ろうとする態度が民衆の間に広がった。震災の渦中で出された治安維持令はやがて治安維持法となり，学生軍事教練も始まった。小樽港の朝鮮人港湾労働者の蜂起を想定した軍事教練を非難し軍教反対を呼びかけた学生連合会の活動に治安維持法が最初に適用された。

日本の「満蒙権益」固守の態度も強められ，急激に進展した中国の国民革命との間に激しい摩擦を生んだ。日本は出兵による露骨な干渉と排日運動の激化との悪循環の中で，張作霖爆殺事件を起こしてまたも隠蔽劇を演ずることになった。中国人虐殺事件に対して当時の読売新聞は「凡そ国家の名誉，国民の信用は，既成の事実を事実と認め，自ら進んで其の罪過を匡救する勇気があってこそ，之を維持し之を回復し得るのである。其の罪過が国辱であるよりも，之を改め得ぬ事が寧ろ大なる国辱である」(1923年11月25日社説）と論じた。自国の罪過を明確に批判し政策の改革に向かうことができなかった日本は，同様の罪過を拡大再生産する道をすすんでゆくことになった。その傷あとは今も残っている。

関東大震災下の中国人虐殺事件関係史料年表

1923年9月1日関東大震災，東京・横浜に大震災，朝鮮人放火暴動の流言
（大正12）
2日流言拡大，戒厳令発布，第2次山本内閣成立，朝鮮人虐殺事件拡大し数日間激化
3日大島町中国人労働者虐殺，夜亀戸署員，平沢計七，川合義虎ら検束
4日戒厳令司令部，「支鮮人」を習志野廠舎に収容方針を命令
5日未明に平沢，川合ら労働運動家10名殺害（亀戸事件）
12日大島町で中華民国僑日共済会長王希天殺害事件
16日大杉栄ら甘粕憲兵大尉に殺害される（甘粕事件）
10月16日自由法曹団「亀戸労働者刺殺事件聴取書」作成開始，

1924年1月　種蒔き社『種蒔き雑記—亀戸の殉難者を哀悼するために—第1冊』，金子洋文編集
山崎今朝弥『地震・憲兵・火事・巡査』解放社，82年岩波文庫

1925年7月　警視庁『大正大震火災誌』

1926年3月　東京市役所『東京震災録』前輯・中輯・後輯，27年3月別輯

年月不明　司法省編『震災後に於ける刑事事犯及之に関連する事項調査書』

1930年10月　美土路昌一編著『明治大正史・1・言論編」朝日新聞社

1958年11月（昭和33）　斎藤秀夫「関東大震災と朝鮮人さわぎ—35周年によせて」『歴史評論』99号，特集「大正時代」の再検討

1960年10月　自由思想研究会編集『自由思想』2号，大杉栄特集2
安成二郎「大杉栄虐殺に関するメモ」正力松太郎談話

1962年6月　今井清一ほか編『日本の百年5震災にゆらぐ』筑摩書房

7月　田辺貞之助『女木川界隈』

1963年5月　労働運動史研究会，震災40周年記念研究集会，今井清一，姜徳相，南巌，戸沢仁三郎，秋山清報告

7月　姜徳相「関東大震災に於ける朝鮮人虐殺の実体」『歴史学研究』278号
『労働運動史研究』37号，特集関東大震災40周年，上記集会報告収録

9月　松尾尊兊「関東大震災下の朝鮮人虐殺事件」上『思想』471号，下476号翌年2月
『歴史評論』157号，特集日本と朝鮮—大震災朝鮮人受難40周年によせて

10月　姜徳相・琴秉洞編『現代史資料6・関東大震災と朝鮮人』みすず書房

1965年7月　吉屋信子『ときの声』筑摩書房

1968年２月　ねずまさし『日本現代史４』三一新書
1969年12月　林茂『湯浅倉平』湯浅倉平伝記刊行会
1972年７月　岩村登志夫『在日朝鮮人と日本労働者階級』校倉書房
10月　松岡文平「関東大震災と在日中国人」関西大学院文学研究科院生協議会『千里山文学論集』８号
12月　同「もう一つの虐殺事件」大阪歴史学会近代史部会『近代史研究』16号
1973年10月　『歴史評論』281号特集関東大震災50周年，小川博司「関東大震災と中国人労働者虐殺事件」
1974年４月　高梨輝憲『関東大震災体験記』アトミグループ
６月　松岡文平「関東大震災下の中国人虐殺事件について」大阪歴史学会『ヒストリア』65号
７月　日朝協会埼玉県連合会内関東大震災50周年犠牲者調査・追悼事業実行委員会編纂発行『かくされていた歴史―関東大震災と埼玉の朝鮮人虐殺事件』
11月　遠藤三郎『日中十五年戦争と私』日中書林
1975年７月　角田房子『甘粕大尉』，1979年５月の中公文庫に付記
８月　久保野茂次日記公表，『毎日新聞』1975年８月28日夕刊「王希天事件真相に手掛り/「大杉」「亀戸」と並ぶ虐殺/一兵士の日記公開」，『赤旗』29日号も報道
９月　関東大震災50周年朝鮮人犠牲者追悼行事実行委員会編『関東大震災と朝鮮人虐殺』第１部大震災と朝鮮人虐殺の真相の究明（今井清一・斎藤秀夫）
11月　姜徳相『関東大震災』中公新書414
1976年10月　今井清一「大島町事件・王希天事件と日本政府の対応」藤原彰・松尾尊兊編『論集現代史』筑摩書房
1978年５月　歴教協船橋支部ほか『関東大震災と朝鮮人・資料集１―船橋市とその周辺で』
1979年９月　千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会ほか『同上資料集２―習志野騎兵連隊とその周辺』
1982年８月　田原洋『関東大震災と王希天事件』三一書房
11月　仁木ふみ子「59年目の墓碑銘―関東大震災時の中国人虐殺の鉄証」『月刊総評』
1983年９月　千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会『いわれなく殺された人びと』青木書店
『九・一関東大震災虐殺事件を考える会『九・一関東大震災朝鮮人虐殺

事件60周年に際して』，遠藤三郎「関東大震災—王希天事件について」など

11月　『季刊三千里』36号冬，特集関東大震災の時代，安岡章太郎，金達寿，山田昭次，高柳俊男ら

1986年4月　宮武剛『将軍の遺言』毎日新聞社（85年『毎日新聞』に連載）

1988年3月　外務省編『日本外交文書』大正12年第1冊　8中国人等被害関係

1989年9月　関東大震災下に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し慰霊する会『朝鮮人虐殺事件から中国人虐殺事件・亀戸事件を考える』

11月　横田豊「関東大震災に対する中国の対応」『史潮』26号弘文堂

1991年9月　仁木ふみ子『関東大震災中国人大虐殺』岩波ブックレット217

1992年7月　関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会編『風よ鳳仙花の歌をはこべ』